

宋版『仏国禪師文殊指南図讃』について

—大東急本の検討および日本における受容と変容をめぐって—

森 咲花

本発表は、現在日本に十数点所蔵される『仏国禪師文殊指南図讃』の中で、大東急記念文庫所蔵本のみが宋版であり、他所蔵本が江戸時代覆刻版であるという位置づけを行うとともに、日本におけるその受容と変容について述べるものである。

もとより宋版は、印刷物であることから誤写脱落のない善良な書籍とされ、また当時の中国文化を伝える一つの権威として重要視されてきた。

『文殊指南図讃』は、華嚴経入法界品に説かれる善財童子の南遊求法遍歴を絵画化し、これに讃を加えた上図下文形式の版本である。大東急記念文庫所蔵本（以下、大東急本）は、著者と序文作者、制作場所の記載から、中国の臨安府、すなわち杭州で制作された宋版と知られる。序文には「高山寺」の朱印が捺印され、鎌倉時代初期に高山寺に請来されたことが推察される。

大東急本は、他所蔵本（以下、他本）とは図様が微妙に異なり、唯一の宋版であることが度々指摘されてきた。料紙には竹紙が使用されており、その風合いや字体から見て宋版であると言える。しかしその詳細は今まで検討されておらず、いまだ他本が宋版として図版に掲載されるなど、大東急本の価値は埋没している。発表者は大東急本、成實堂文庫所蔵本、京都国立博物館所蔵本を調査する機会を得たため、図様や字体の詳細な比較を通して、大東急本のみが宋版であるという位置付けを試みる。比較の結果、人物表現は、大東急本が宋版の見返し絵の特徴である目鼻をはっきりとさせる顔立ちを有するのに対して、他本は日本中世の写経の見返し絵のように、下膨れの輪郭に引き目鉤鼻の顔立ちを有していた。さらに他本は大東急本の建物や文様を省略、整理した形跡が窺えた。字体は、大東急本が宋版に近似し、他本は江戸時代初期の版本に近似している結果を得た。

『文殊指南図讃』は鎌倉時代制作とされる大阪・久米田寺所蔵の「華嚴海会善知識曼荼羅」と京都・誓願寺所蔵の「誓願寺縁起絵」の一部分に、その図様が踏襲されている。この二作品の図様を大東急本と比較し、日本における『文殊指南図讃』の需要の過程について指摘する。

また江戸時代覆刻の『文殊指南図讃』には有刊記本と無刊記本があるが、その刊記には高山寺から徒歩圏内にある西明寺の別名が記されているため、当時の西明寺や高山寺を中心に、覆刻版の概要やその背景についても論じる。当時の西明寺は僧・明忍によって中興されていた。彼は高山寺僧であった明恵を慕い、明恵自筆の書物を閲覧していた記録も残っている。また高山寺では善財善知識に関する講式の書写が度々行われていたため、江戸時代の『文殊指南図讃』覆刻には、明忍の事績や高山寺での講式が大いに関連していると推測される。

以上、大東急本と他本の『文殊指南図讃』の比較を中心に、請来の背景や受容の問題、更には覆刻版の周辺についても述べ、『文殊指南図讃』の宋版と覆刻版をめぐらるる問題に正確な書誌情報を提供したい。